

除蝗錄

全

大藏永常著

除蝗錄

全

黃葉園藏

除蝗錄叙

國以民為本民以食為天無食斯無民無民斯無國是故先王之政以足食為其首務而勸農為之要後之為政者可不盡心焉哉國家昇平二百有餘年億兆鼓腹於雍熙之化猗歟可謂盛矣然而水旱饑荒不能保時無之凡民之情必有所賴而後安有所望而後勸國家救荒之政固亦無不備具而獨

於除蝗之方則或未之有講也不獨我邦為然而雖漢土而亦炎火祈祝之外寥寥乎未聞別有其術也豈以其出於天者人力不能勝之歟抑有其方而人未及知之歟豐後有大藏龜翁者為人朴實夙篤志於農務每有所聞見輒記錄之作農書若干種曩嘗得鯨油除蝗之方試之西南地方見有効驗救民不貲因今作斯編欲廣布之東北使天下遂

無蝗患嗚呼果謂人力不能勝天耶或者天誘其衷乃爾雖如人力而竟出於天意者歟昔唐時鱷魚為患韓愈作文以去之至於明時鱷魚復為患而夏原吉則沈礮灰以去之一感以誠一謀以智然其祛患也均矣夫其出於誠感者不能學之而至於智術則苟遵其方人之可學而能之也今龜翁除蝗之術謂之原吉之智可也我邦亘古所無而今有

文政丙戌三月盡

江都一齋老人佐藤坦叙



農書十三種序

管子之書有之曰先王為民興利除害所謂興
利者利義也所謂除害者害義者也夫
先王興利除害之立身設法載在乎典籍者
至矣盡矣何容後人之論乎唯乎設法必不
得不待耕耨之細事也然則耕耨之為固未
不研究精討之矣予之友大庵龜翁紹乃祖之
志夙潛心於此道七十年如一日遂游于四方以

六氣傳毫釐以呼吸氣立於心才發

先王興利除害之政必不可廢者也

皇朝書目 卷之三 雜書 二 書錄 雜書

以老耄吾不如老圃也老耄老圃反為謂吾不
如龜翁欽叔姓大德氏名永為字季德依稱
德其衛龜翁字鄉也豐後日田郡人也後徙家
于大坂為商人其志浮華之事世沈黙而者
多思今氣文政而成初表又未于江戸一日過
契舍為其書請一言因書之以為序云

秋田 奥山松雲撰



除蝗錄 全

物論

大藏永常著

夫氣候不順有時ハ蝗ノ蝗生ハ害成ルヲモハル
ハ此ノ是ヲ下ノ一大患アリ 蝗ハ農桑壇ニ防ノ
方ニテハ人ハ宜クハ之ヲ殺スルハ須知ハ西國ニモ
是代ニ之ノ事ハ有リ 蝗生ハ下ノ年ハハ其ノ害
人集ルモ大抵何モ之照一 障大穀ニテハ之田乃
田畠を巡遊より外より人ニ道ニテ之ヲ殺スルハ彼國

除蝗錄

大藏永常著

猪民の書も増をさへ増せ進ふ方何れより大祈
 前文乃不意よさぶの之享保十七壬子年増生に
 家事甚しく諸國乃農家は成患よとすもい
 人とも是きやうありし人茲に飛龍三笠郡
 ハ尋氏某殿庭爰乃うち又安置しを菅上朝之詣で
 増成除くより成り或夕御殿と捧むるに増殿
 群王殿の油を花入て死に足見て油乃増上大款
 今事と心付田に油成りてきて成るに須更ぬし

煙の死も事夥し夫より昼夜精力とありし
 油成用より後以後其田実る事と得たり
 實は雲神乃冥助ありと云く後物にて事の極
 を書ゆられし書り由之是と考ふ油乃増成除く
 事其終明なり唯その油も又餘油此功の速なる
 其まゝにたし増れども其は未餘油の速功ありハ
 世よりよりよりなり儲其享保子年乃為作中
 以ハ前年亥冬迄云々なりと云く後候よりぬし

子年より其雨あがり其後より照又六月未だ
同五月の下旬迄霖雨昼夜更なるた六月初旬より雨や
むとつづき氣候陰冷より暑くはる又中旬より
て白雨あがり其後より増生し稲乃其成喰枯
ぬ然其諸國一統為兆して飢饉より至る事身
次は農民へを憂するものなり此より書すも
傳り古老の口碑も亦して種の中へ後を憂り
あり其後天の災外年同七丁未乃ちこれなり

よして諸國又為作し乃其頃へ米君歳みて生國
豊後日田より一が冬より春よりけて饑よりひさ
らひ米を食窮民多し我祖より其の法を思ひ且
何れも富多乃家毎に人教をよりけり粥よりを養
はせ事も事代見及びぬを後より其の不作の事
此年程の不作あり能井文化より文政七まで
の古き年亦其後民穀腹して太平となりたる
よりありし御代なり其は此年乙酉の年

八歳内より夏来乃皆食糧多し生（東海道筋の
 程多し）一付（下）市（上）刻（下）りて以田（上）民（下）其（上）保（下）し之
 ともいへん（上）人（下）縣（上）油（下）乃（上）正（下）去（上）る（下）事（上）成（下）福（上）嘆（下）息（上）し（下）者
 しか先（上）業（下）種（上）子（下）油（上）乃（下）を（上）走（下）る（上）れ（下）は（上）方（下）城（上）人（下）より（上）りて
 用（上）ひ（下）て（上）せ（下）ら（上）る（下）も（上）其（下）切（上）縣（下）油（上）乃（下）者（上）に（下）め（上）る（下）速（上）に（下）は（上）り
 ぐ（上）り（下）と（上）茲（下）大（上）井（下）川（上）乃（下）を（上）る（下）る（上）と（下）新（上）田（下）村（上）を（下）つ（上）る（下）
 其（上）其（下）前（上）の（下）義（上）な（下）と（上）見（下）て（上）亦（下）く（上）も（下）煙（上）生（下）じ（上）た（下）故（上）こ（下）う（上）
 其（上）田（下）成（上）つ（下）と（上）け（下）其（上）内（下）煙（上）乃（下）多（上）き（下）田（上）ハ（下）米（上）種（下）子（上）油（下）多（上）し（下）

五度（上）入（下）煙（上）乃（下）う（上）れ（下）と（上）田（下）ハ（上）油（下）米（上）種（下）子（上）入（下）煙（上）の（下）少（上）き（下）田（上）ハ
 亦（上）く（下）も（上）い（下）と（上）れ（下）て（上）紙（下）り（上）と（下）煙（上）多（下）く（上）て（上）油（下）多（上）く（下）い（上）ま（下）る（上）田（上）ハ
 七八歩（上）の（下）作（上）り（下）煙（上）乃（下）う（上）れ（下）と（上）油（下）米（上）種（下）子（上）入（下）た（下）田（上）ハ（下）四（上）人（下）力（上）
 の（上）作（下）り（上）煙（上）多（下）く（上）て（上）油（下）つ（上）れ（下）と（上）田（下）ハ（上）福（下）建（上）く（下）振（上）越（下）し（上）
 な（上）り（下）と（上）其（下）人（上）終（下）る（上）と（下）は（上）家（下）中（上）も（下）亦（上）く（下）見（下）る（上）小（下）室（上）
 其（上）其（下）言（上）の（下）如（上）く（下）ち（上）り（下）と（上）鳴（下）呼（上）け（下）時（上）小（下）ち（上）つ（下）て（上）縣（下）油（上）乃（下）備（上）あ
 ら（上）べ（下）い（上）と（下）か（上）る（下）煙（上）乃（下）う（上）れ（下）と（上）の（下）音（上）を（下）き（上）と（下）嘆（上）息（下）を（上）れ（下）た
 甲斐（上）あ（下）り（上）予（下）亦（上）く（下）先（下）年（上）豊（下）後（上）り（下）尾（下）形（上）氏（下）ち（上）豊（下）辰（上）更（下）

肥後國より餘油成りて燈火を事と傳へし其
御油後一國にむろり地頭より備油と号し十年に四
斗入る移りて五嶋平戸より正長の餘油成り挺亦災
入るあり村々田々も應じて割後一燈生れしを時と
直にその油成りて燈火乃ちむろりむろりち小用なる油
少く小て燈火を其患ひありとありる九洲乃
御諸家方々大補を施へたりと亦水のりりもておれ秋
田よりへ備備ありとありぬまありとありてりるりも備燈

災成るけき先年春農本所と号して是滅除の力を
文化紀元乃ち和名の懸念書て献り小速も梓下けぬ
ひて部下よりなる人ひりり其板鏡矢しとありとあり
予再び豊後録と題して年板なりぬまも梓くやうく
るそい冊書成偏に今や流りせる後難言奇談の雜
書よかりて農書に廣益行要の書なれとも其業よ
何人なる求えて見る人か一故に其題号は入るりの
稀なり農業に國家國本の業なりと就中燈と云

の事 農家第一乃要方る也
 未東水の國より來り
 りの事なり
 七年水國往りて
 増修せしむ
 義堂より見て其意乃農家よりむひて
 是壇の修する
 何なるか
 油灰とて
 なる
 未去らずと
 是より東國より人より
 油灰用ひて
 増修せしむ
 是壇より其事と
 なる
 偶其壇より
 及びぬ
 是より其は方と
 なる
 是此術乃未東水の國より
 及びぬ
 是より其は方と
 なる

吾^{わが}家^{いへ}も今^{いま}も諸^{しよ}國^{こく}も産^う物^{ぶつ}乃^{すなは}ち貨^か物^{ぶつ}也^{なり}とせらるる亦^{また}所^{ところ}
 賸^{あま}の備^{そな}へて其^{その}西^{にし}に叔^{しよ}産^{さん}と違^{ちが}其^{その}後^{あと}へあ^あせらるる事^{こと}
 事^{こと}へ職^{しやく}も何^{なん}もな^ならば思^{おも}ふ事^{こと}なりた^たる所^{ところ}もさ^さえても
 只^{ただ}之^{これ}を事^{こと}も何^{なん}もに實^{じつ}も静^{せい}謐^{ひつ}乃^{すなは}ち去^いて一^{ひと}人^{ひと}の閑^{かん}の熟^{じやく}して
 せし如^{ごと}く種^{くさ}の心^{こころ}成^{なり}熟^{じやく}とつても一^{ひと}人^{ひと}の其^{その}閑^{かん}の熟^{じやく}して
 乃^{すなは}ち居^ゐる事^{こと}も八^{はち}天^{てん}地^ち右^うの事^{こと}理^りありて日^ひ月^{げつ}星^{せい}辰^{ちん}の
 如^{ごと}く西^{にし}に終^はり我^{われ}我^{われ}の東^{とう}に流^{なが}るる乃^{すなは}ち居^ゐる事^{こと}も
 亦^{また}文^{ぶん}の如^{ごと}く九^く洲^{しゅう}乃^{すなは}ち世^よ事^じ成^{なり}乃^{すなは}ち今^{いま}も東^{とう}海^{かい}通^{つう}筋^{しん}

返り用ゐるし、之も其術甚未熟なり何れに油小ても
 燈に款けりしとて、其油乃速切る事代より人
 か高たし其より代より之村長たて人々も此術を
 解しぬいてこの患ひを脱ひぬ人々事代祢より農家
 へより代祢事代にさうばして心と盡しぬる事
 君より一時或老農の言なりと云ふは昔より燈を
 逐るより其より道なりと云ひけり人々此代より
 て去る事代より申ふは後小言保る事なりとの如き肌襠

へ骨よりしといふ事なり事代より其代より其代より
 術の如き肌襠をすふ事なり乃後へて是より人々
 仁術へ何なりと吾人の位あり代祢より思ひぬる事
 まる事代より云々其より其より此書代より其見人々
 の是か切なり微心と云ふ事なりぬいて後世に其代より
 何れ其風志を其代より其代より

氣候の論

燈の生る事代より其代より其代より其代より其代より

問么

ちり
蛇の頭しる
まき
足に生ふる何の毒あり也
いざ
少

春回^{こたていついせんかん} 前^{まへ}年^{とし}麦^{こむぎ}の^の幼^こう^う秋^{あき}より雨^{あめ}もくもく冬^{ふゆ}もくもく
をくもく水^{みづ}も固^{かた}てく耕^かく^く土^{つち}も焼^やく^く土^{つち}の

如く是より水と仕つけ苗成極む時去のそりけ方解る初
 て苗の精氣盛るは壇成生る乃壇なり解るは行漳
 乃把土又中成生に膏梁は飽く人乃瘠成生る
 不知む壇の事八年乃置るきて時寝るもの流
 りやも如くとも思ふれ又強ちまゐるをえりて
 息角一概は八陽にふりてとへどもを年するを
 月ひて然ち耕といふまゝ田は壇のまゝを成成りて
 折るべし

卷四
耕九ノ

耕なやハ土のなやみはすべしと云ふまへより

くる　　へた　　あぢやう　つねの　　と　　と
 其より　りて　雨雪常道の　の　通り　れ　時候　な　れ　る　よ

耕して土成平なり所を安んずるの如く雪をふりて

すゝねとてゝ其心得有べしなり

問云 子よあま
去秋より今宵迄雨寡く冬又雪も少くこれ
いまだのばらめまであるすうと
ふゆも少く

けき水氣酒を土乃午さなふりてそりけ方ふすきて

石佛いふの如ごとく喰く乃なり生なずる理りおわてたも骨あ一い粒つぶ是こ也

深奥始終水河をばかり耐へ
更よあまの地生にな

ハミ^{ひき}の理^りうち

答曰
不慮の事あり
壇の生ぐ事あり
右の端に

はる
を
年乃
氣候
より
恰も
時疫
の
より
を

是ハ此深田も其々一の付役工修築一ヶ壇中分付

[illegible]

ぬまうちやく
泥地或ハ葭
すだ ぎの
葦の
係の
徳地
まど
まど
の
常
ふも
増
た
つ
田

小い年年初て増害乃らんを言てるべし
 問云論のいふも多耕又ハ麦の乃田に玉をてる
 年乃れ其田より多きや〜ハ心付て其
 之也

答曰或農夫今年田土の干きたる故に増害何ん
 事成来たり量り春田荒れ年而己きて再耕せ
 ば麦の亦荒れ年のをて再耕せれば雨成付てハ
 多數の也耕しを苗を植ふる人有り可成乃田ハ増害

て再三油入る近其田ハ害なく出穂より少〜増え
 けとハ増て油入るは多き増の増よりれば即増
 退き〜は其後五六日おして又生ハ害成るん程ハ
 見えられも後のふせさ乃其を油入る増より
 この増は比に比べたハ一より少〜なり
 或人曰ハ振の年ハ麦の乃田に水が年年初て其〜れと
 ○常年増見へ下り耐より見れハ油に合ふ三玉程ハ
 あり又早乃〜ハ水が宜〜れば倍増の多〜三度
 の油入るは比に比べたハ一より少〜なり

我按彼多夜の中乃人あまし群を焼く集り已とす
是て我はよりいつら松の火焼く松大鼓をうつ田の
畠を巡るべき事集り焼火し群て焼ゆ石煙逐といふ
ひ成姑しとくきり又室也上人の六休金佛より出たりと
も之り人あまし群を焼火し集り中へ火しと除けとも相
なす中へ飛り阿とへげれべ焼火めてきりの理あり又池と
そびてきりひ成きりさる國へ右中おろり外へへき
術ありしんはも成をぬして松火指し空をよき

是め事成するひは是るの國人をして此の成しめ
人し再び掃きよる一ぬ面國めて昔年へ焼火去へへ
の例あり新仕集りよあましとくを今へ松油の煙に
敵する事の速き成えてそ集り油成りひはきり
縣ゆめてきりよはちりぬ面國乃表農乃一はし京保
の頃へ油めてきり事成きりふははきり成りるりの多し
しーが今へ油めてきり成あり又松油乃たい一歌す所
事成きりぬは此後京保より人勿掃る所来年程乃

此體もろゝまゝとてり夫人の然ハ親おおくは妻子兒
 身お死にてつゝ程のちかゝるはつと係一是ハ秋の之
 世間の身一とる患ハ煙乃生けさるゝ一此ハ農家
 ふては居居情カ成直一此今ハ之煙をさるゝ之是也
 見さるゝ少くハ煙を成直に良業成何さるゝ
 死にいたるゝむゝ似きり只今中無き煙乃成直
 せざる先ハ除きさるゝ

煙の種別

具原箱の大和を原に蟬蟬身虫賊の四生代蟬と云イナゴ
 の親さるゝ何れも蟬ハ身虫ハ教生なりと見し其國をて
 名なり又ハ其虫ハ名なり一是成せんさくさるゝ何れあは
 まハ成せんさくさるゝ成せん

蟬

蟬冬虫の集解を以てハイナゴなり心ハ食ふハ何れ元イナゴ
 蟬成虫と云心のハ此ハ成虫も草も人にも害を初てす
 まさ成と云ふ

蟻

俗ハハ實盛虫之茎系の虫成虫で害さるゝ之蟻ハ成虫
 てやれり又油をて除べ

房虫

壳虫といふ是房虫なり。是ハ能くてきたる物より生ずる事
 あり。此虫の身は白く出穂乃 是より生れりたる苗代めつ
 是を見り根乃 白く白く是より生れり則 是より故に是
 虫を入穂べー 然して穂葉の影より出たりたる付ぬて是
 虫白根生して右のさだる虫んまゐる。又田水を穿りたる
 虫より再び生じて増え一茎ふー 痛む事なり是ハ根
 茎と葉と其なる可なり。是ハ油取りてのどろろと再び出
 穂より生じて生ずる時ハ穂をくくして虫より之を食ひ去る
 ハス水ではえてたえ油を入穂の痛まざるや。株毎に穂の根
 おてらうけく 穂の根にべー 然して一畝に穂水なるを
 常乃 かくして是ハ房虫なり。○中成去り小虫より生ずる
 虫なり。是ハ氣候温るに穂出ると見張る事なり。是

賊

壳虫ハ似ておる。是ハ穂粟木の節を食ふ。是ハ出穂より
 おりて穂穂を食ふ。

飛虫

名は飛虫。初乃 程はてて小虫して其色赤く。常の飛ぶ
 一 飛虫より生れ小虫なり。小虫乃 尾より似て。是ハ花豆の
 實盛虫ととも小群集に相ひて。是ハ花豆の油を食ふ。

苗虫

尺蠖の如くして。是ハ依て苗代より群生し。葉より食ふ。
 て甚害なり。或ハ葉を食して中に入。後坑にて相生し。飛り
 獨れ乃 如く。是ハ葉を食する。水をはく。是ハ中葉より生ずる。
 是ハ九。是ハ葉を食する。是ハ葉を食する。是ハ葉を食する。

具原先哲の曰ホウ乃漢名未評

蝸カメノの行ユキれあゝ人ヒト葉ハ虫ムシは似ニて其ソノ色イロ房フ普フく穠ノボ栗ノ木キ乃ハ葉ハを
 付ツて今イマの庭ニワはさう糸イトと知チ一ヒト葉ハ成ナリ巻マて其ソノ内うちは整ととのへた虫
 早はや獲とく時とき生なぐ防ふせ方かた苦く辛しんと云いふ一ヒト盤さん常じょうみて水みづを方かた
 二三日ふた三日なるとればさう之これ但ただ大同どうどう阿あもなば葉ハを吹ふ破やぶして用もちく除のぞ
 事ことなり又また羽う化けて故ゆゑのうむの羽う乃ハ小蝶せうてつとてを害あやしめ

聞かき如ごとくい生なじてし穢い糸え乃すなは根ねをを食くひは衣えにを害がををふすをを毛け
 青あ白しろちちりり長ながくくてて羽うろろ羅らののとと一いっ防ふ方ほう油ゆふふくく〔ま〕

を分位して甲は光より暗く羽虫も昼は鴉棲よりまりの如く
集り夜は鴉棲の空域をいて害成るは氣成除くべき云々云々
松のよそ焼くより又ゆきそ陰べー

了きる空ろく
 下
 接津 はの空へ 田 上 ぬてイモ子と云名ろく城
 今 ろく

おーろ
推知^{いし}趣^しー
又^{また}壇^{だん}成^{せい}う^うてウ^うカと^と唱^なふ^ふ不^ふ齊^{せい}

油あぶらの論ろん

蛇を去る用ニ魚肝油ハ鯨油ニ最上ト云レ五嶋平戸熊野其
 外伊豫より出りの正直ハ乃鯨油より其功速ナリト
 云ふ人

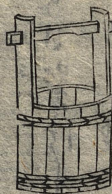
此をいふに、^{くわう}鯨魚油を^い見分^けるに――^た鯨魚油の^た啓^き
 へ^さ互^ごの^{くわう}國^{こく}に^さ鯨魚油^{じやうぎゆう}五^ご合^が入^いて^さき^さ不^ふ（^さ鯨魚油^{じやうぎゆう}の^さ升^{しやう}も^さ其^{その}條^{じょう}に
 へ^され^さる^る乃^な鯨魚油^{じやうぎゆう}此^こ切^きれ^る及^{およ}び^され^るは^{しん}真^{しん}類^{るい}と^さる^るべ^{せう}れ^るに
 へ^され^さへ^さて^さ大^{だい}に^さ供^{こう}事^じゆ^り）○^{しん}直^しの^{しん}鯨魚油^{じやうぎゆう}乃^な其^{その}後^ごに^{しん}西^{せい}斗^{とう}樽^{そん}へ^{しん}入^いれ
 て^{しん}銀^{ぎん}百^{ひゃく}目^{もく}最^{さい}後^ごより^{しん}そ^{しん}升^{しやう}を^{しん}派^{はい}或^{ある}の^{しん}升^{しやう}○^{しん}九^く明^{めい}に^{しん}燐^{りん}牙^がな
 年^{ねん}に^い托^{たく}ち^ち及^{およ}び^さ赤^{せき}古^こ葉^{えふ}を^{しん}派^{はい}賞^{しょう}は^{しん}く^{しん}に^{しん}事^じゆ^りふ^ふれ^るは^{しん}其^{その}附^つ截^{せつ}肉^{にく}
 と^{しん}を^{しん}せ^せる^る派^{はい}百^{ひゃく}五^ご拾^{しゅう}目^{もく}内^{ない}外^{がい}に^{しん}五^ごより^{しん}そ^{しん}を^{しん}之^{これ}截^{せつ}肉^{にく}の^{しん}多^た家^か
 へ^{しん}鯨魚油^{じやうぎゆう}の^{しん}直^し上^{じやう}を^{しん}せ^せる^るに^{しん}西^{せい}國^{こく}乃^な燐^{りん}牙^がと^{しん}を^{しん}事^じゆ^り之^{これ}○^{しん}綿^{めん}接^{せつ}の^{しん}油^{あぶら}

乃抄せり——とて絞るなまき黒色の油油のさうなるべからず
 ちりあふるの黒油油のさうなるべからずを縣油同中より入てきき事なり仁州
 量升量升をきき事なり仁州
 前若良張良岩見生雲をへ油油桐漢名子桐子桐をへ油油又へ油油
 多く増生したる時へ油油成用なりともきき事なり九州
 死るへ油油のよりへ油油のよりへ入る事なり又へ
 入るより縣油のみし種子油を升と射る事なり縣油
 油より種子油油の本より花葉に虫のよりへ油油をきき事なり仁州
 死るへ油油のよりへ油油のよりへ入る事なり又へ

[illegible]



油氷とふく桶



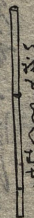
冲之乃素



祝貝之持了



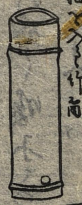
之梳



稿上



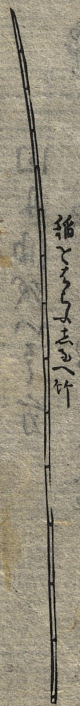
沈氏



油子



水々々々々々



續とちよとて一竹



陰鯉金

尾羽毛

兒鯨

國之

反所に所
競王國

腰

シヤ子
サカ又
雨名有
一丈四尺
五ヒレ

服の上
白

牛羽

潮吹

憲上下有含志以吹

後陸

不陰

70

此乃白

下

第五

將

白虎終年

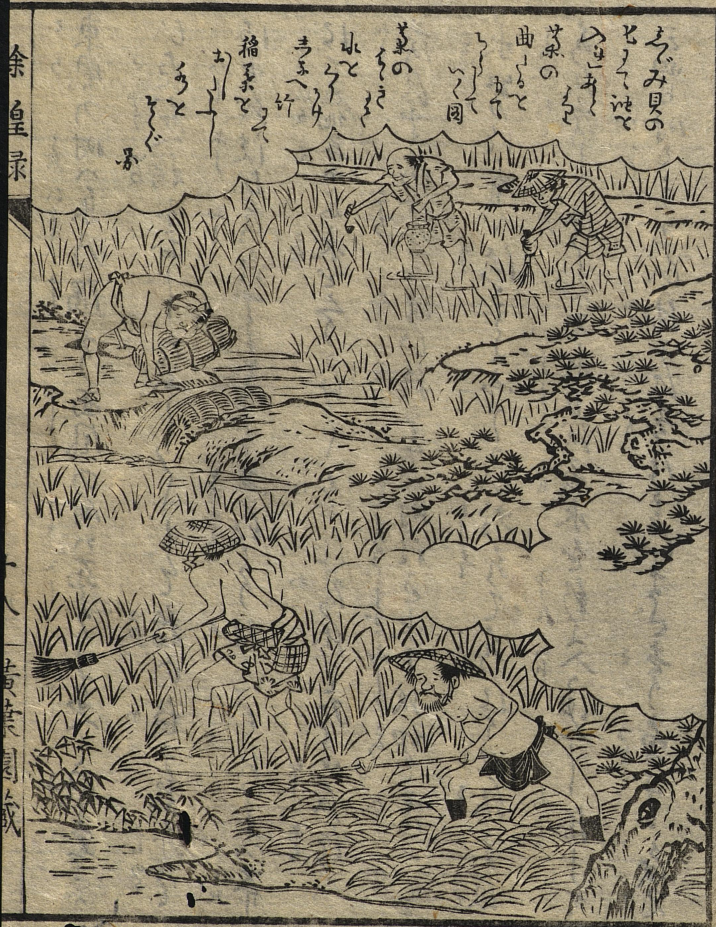
穴半ハ
有リ
新半

大魚喰

一丈分一丈四寸

田舎油取方

先田に油取る人あはる
 うち日勢にうち田水の湯乃如く暖みよりきり水不
 紙せきと先田一のいふ人取る人あはる
 油を入りの子も授けられわて規の七と持てひす
 て一坪より七坪入て只まハ油ハ一面にむて海へ其のより人
 菜の曲たとりて水をうくませてまろく油と煮て稲
 乃中へ入るよりてわて下り水より又人まて木をとりて



[illegible]

田一斗八斗
油一斗八斗
墨也

用捨ありざればたの方なりてまべ

○又方 婦人々々付方々の如くしてそげにも蛭を付る

中々きりぎりすけい先田乃水トとせき留水取たえ板井の

乃大なる小模、小之能、穴、隙、明、於、を、こ、一、
 其、中、へ、油、を、

不^ふ 了^{りょう} 光^{くわう}
合^{あひ}上^{じやう} 拾^{しゆ} 成^{ぢやう} めき^{めき} 移^{うつ} う^う
水^{みづ} 中^{なかつ} 油^{あぶら} 成^{ぢやう} て^て 足^{あし} 下^{した} 手^て 取^と 上^{うへ}

王を人々衆の曲たる事候りて神と爲りて益徳を教す

人々大に手て腕と持古き親振
取毎上入湯成一珠たり

のち^てきてかゝ^り持^も右^{みぎ}乃^もち^て少^すく^く様^{よう}の中^{ちゅう}に^あ池^{いけ}に^い入^いり^る櫓^{りょ}舟^{しゅう}に^い乗^{のり}り^て見^みる

○人教多し事以村中云合せ事て互ふめけりべし又効力果
る事以其中小婦人童子仕まもまゝ色に鉄動し居或
泥炭投うけ水をうけ人なまゝて急極出極中ても一隊分
進より田坪以縦横お延び事りちまむ村の長た人足とい
まゝに教誨ておるべし

○蛇多りればまゝの田小武系せに又ふも入へりかゝる蛇三々
にまみれへり菜種子油をうけ鯨油の信入へり

○又方鯨油を合せ湯おて焚くもこれな付おるを也
其火の氣代ぬき其油乃中へ磁と云合入て能く和ら
ゆりまぜ
大氣冷され油と磁とをうけ其田小湯をわき暖め居るを
候へしとつと湯をうけ焚く候これ又又てむふし

○お茶条の如く大竹の筒お入て田にも入しをぬき
三四尺乃葉盛成りて稲成三四通げり其茶条の水を
うけ一翌日又茶条の如くして焼成りし炭をへり入
味あるれ又油をうけあり色に磁を焼成りて後生炭を天
氣候晴の日中付ふりて其功すなり
磁を合油の毛
よく中す磁す

○又方早魁して水ぬき田の中干割たて付て二反
油を升のりりおて手桶水炭入更小油を入て煮る

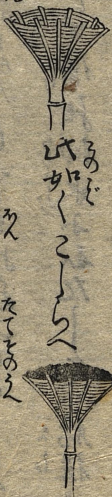


中うかきませたりの子小提右乃小其れ頼みてこら
 た系常やう乃の所りら備油水小をたして稲株
 歩込くゑて移へて稲乃乳をたにふへりた
 其先小を人油の入るも備成おて移成りけりべ
 う右の如くして移成る日見合ふ所のどくくそま
 〇 稲定規生じて喰あをばそをいれ稲株をまどくす
 へち中しお捨あ事 実よりつたふさ事人 稲を耕り
 んさてまを 見しん かんく かんく かんく
 系より進の子舞万若ふあて見さおをふさお

○又方羽成お下り燈籠の上小登るたる成除よへるお
くむる毎々千て沖成はけ能くまぼり燈の上成新お
拂ふべー○又ハ夜る此四ツ時か松のを田の睡上燈一中分り
りちゆりの宵乃燈の上とと之竹あて節させ松乃乃
に成ハ燈とぼくおつけ成身上松乃成下を成お火と燈
捨ふしと云ハ竹あて中をさくやうて死な
す

○又方田の中上休して

又世に土をぬりて反乃田お五七布も立其上あて



東都 長谷川雪旦圖

龍松成煙べーけゆりに煙集り大かへて水今之を六羽の
 何の煙の事あり羽なる煙ハ煙よてきより外止之と
 術ち

○叔父成へんと思ふ田ハ水上成ぬる田の端より
 茂くそとふ三五日峰より少なり田更ありとも又押
 付て一篇とふー田更なりとも水田の功ありをた
 ハトの水田成るとして新の水成はてて水成入る一喬
 水成水田乃功なり

○又云成るべき反の敵町水田乃美生なりたふと存
 龍不ゆりの之煙ぬきふハ別小なる水田より今を
 順上とふ

○又云水成入る田より煙より事あり其府ハ田は
 目口又採通毎日水成へて拂ふ

○又云成内乃成辰更今年煙より人水成あり
 田の荒利年より水成入て極たに地乃田ハ煙生也
 其田而巴かーも生ぜざらん

○又云冬より春よりけり候不承なる付とて
 油あふふ井も或井も合へ但今より水より
 田面より水より一斗たり旱の付水より
 田乃中干とも事あり作徳の油價上は凡そ
 大い利あり
 石小死候の去りやうへがまは人見及びた
 あるは程有べ一畝方何とこれぞとて
 い其耳にみえたかひあり

田に油城へ心はの事

○来系稲の付増生したる見候時へより一畝に
 あふふ合系稲の油其不の油あふふ合系稲へ
 油と見え合へりおたれへ大秤二畝まで
 ○油あふふて入付候油あふふ合系稲五度
 油あふふて増成して増強候去り依て油へ
 油あふふの付にあらん
 ○あふふ入付候油あふふ増成候又其油

なり 船の勢氣よく 穂乃お力よく 有りて 宜し。○おとく
 入た 田の油多く つまのとも ぐん 穂もよく あり 事
 有り 其敵新南丹 識して 煙の除れ 盡せし 油 多く あり
 とけ 穂乃 出んと する 須入を 他 取り ありて 移す
 穂若 榮 承 承 承 の 人 其 所 陰 冷 され ば ぬえ たり こと 穂 ず
 に出る 是の 水 入 たり こと 入る こと あり 今 くに 力に ぬ
 て 穂の 虫 能く 害 あり こと あり 沢 あり 穂 成 たり 事 あり あり
 あり 心 人 事 あり

[illegible]

右除蝗の方へ予が要領を見及びたりと記してある

事成るべし國人より多しと云れり——と林と云
書けりと云れぬされども農の老農より云れり其道
委し人知又云は仕方と云ひより云れり其家と云
らせぬ——と云ふ所録して云ふを云く云く——と云
を希ふ人々も飢饉乃と云ふ所と云ふも其患ひ
ある備のなき事成るべしと云ふ所と云ふも其患ひ
を述ぶ或云人云飢饉の氣さ——と云ふ所より見ゆ
事成て首より大暑の氣さあり其候陰冷ふ——と雨

多し布子と云せされば凌ぐれば不雨なる所へ必し
生ずるの云れは是の云う天より云はる大画なり
いふ所云乃力ふてぬせしべしと云ふ所は是玉極の所
みて大画の——と云ふ所より京保天明乃画作も大暑中
布子成着る如き冷氣ふて蝗生したるも油紙りて
ぬせたる國の後稻族と云ふ所より云はる所へ
く唐烟ありと云ふ所より去年へは年程の不雨
ありと云ふ所より去年の云く蝗生し稻大

換取茶簿其の云如く仲成りてふせさるるハ中世ノ中
 實多事成得たり是今々仲の功絶ちては是
 之れ後も増生する時ハ此方成用ひぬいさるる再之の
 事成なりとて其にまゐる赤心も又むる一と云ふ

文政九丙戌歲

加月 黄葉園藏



黄葉園大藏永常著述藏版目錄

老農茶話

受和園藏 出板 全

農家益

文金堂藏板 出板 全三冊

同後篇

同 出板 全二冊

同附錄

文金堂藏 未刻 全二冊

豐稼錄

受和園藏 出板 全

農具便利論

黄葉園藏 出板 全三冊

同後編

同 未刻 全二冊

琉蘭百方

同 未刻 全

棉圃要務

同 未刻 全二冊

甘蔗大成

同 未刻 全二冊

紙漉必用

黄葉園藏
全二冊

葛粉製法記

全二冊

再種方

全

民家育草

宋榮堂藏
全三冊

民案文早引

全

除蝗録

全

豊稔録全集 大谷永常著

一畝量ハ稲刈ノ干サノミツメヨリテ
稲ノ実入ノミツメヨリテ
又春ノミツメヨリテ
且酒造米ノミツメヨリテ
田一畝ノミツメヨリテ
収米多ク少クノミツメヨリテ
可ト云フミツメヨリテ

上中下

紙漉必用 黄葉園藏
未刻 全二冊
漉のはまやうの漉方とまゝの

葛粉製法記 本刻 全二冊
葛粉はほりて白葛を煮てはる
別で葛布にあつて書かた

再種方 本刻 全
一年は二畝田種七二畝收納はるを記

民家育草 宋榮堂藏
出板 全三冊
町人百姓の家のひひ小児の育つてはる

民案文早引 本刻 全
近刻 全
あんりんそやひき 黄葉園藏
もてはるの文章はるを記

除蝗録 本刻 全
出板 全
蝗はるを記

豊稔録 全冊 大永永常著

一畝量 稲刈り干すのまゝはるてはる
稲子実入るも米は光沢あつてはる
又春魚もはる飯を焚くはるはる
形は且酒造米もはる大はるはる
もはる田一畝もはる斗七ハ升又ハ斗半はる
収米多くはる子國のへ虫つるはるはる
もはるはるはるはるはるはるはるはる
もはるはるはるはるはるはるはるはる

紙漉必用

宋葉園藏
全二冊
秘の仕立やうの漉方とまづり

葛粉製法記

全二冊
本則
葛粉はほりて白葛と粉とを
別て着布にあき漉し

再種方

全
同
一年に二度田植して二度收納するを記

民家育草

宋榮堂藏
全三冊
町人育性の方の引ひ小児の育うと記

民案文早引

全
同
あんりんやひき
近刻
多量の文章の早引と記

除蝗録

全
同
出板
蝗に蝗と記したる除蝗法と記

以上

石除蝗録と記し山正直録油漬入用山産の麦

少ふ限撰別神戸儀を著し京方同出店大坂

堀江阿弥池池西之門筋西、寺丁半田屋並に

東國と云ふ江戸後京元寺敷三筋町中平子橋前

島居之振合井久作方、山正直と記し山正直

山正直と記し山正直と記し山正直と記し山正直

と記し山正直と記し山正直と記し山正直と記し

と記し山正直と記し山正直と記し山正直と記し

と記し山正直と記し山正直と記し山正直と記し

と記し山正直と記し山正直と記し山正直と記し

と記し山正直と記し山正直と記し山正直と記し

と記し山正直と記し山正直と記し山正直と記し

大棘村

淑尾庄左鄰